



## 西洋事情 後期鉄砲洲時代の塾

### 【はじめに】

少し話が遡りますが、富田正文著「考証福澤諭吉」を参照し、はじめに「後期鉄砲洲時代の塾」について紹介します。諭吉は文久三年（1863年）秋に築地鉄砲洲の中津藩中屋敷内の五軒続きの長屋一棟全部を貸し与えられて、従来の塾とは比較にならぬ大規模な洋学塾にする用意をととのえた。しかし、最初のうちは、入門者も多からず、「大阪の緒方塾で先生と同窓の老書生もあれば、入塾とは名のみで教場には出ず終日何か奔走して夜ばかり寄宿するやうな恰も政情視察を事とする諸藩の有志家などもあり、又当時の習慣として剃髪してある医者や書生もあり、まるで梁山泊ともいふべき有様で、純然たる学生ばかりではなかった」と言う有様で、諭吉の所期する整然たる学塾の姿とは程遠いものであった。

諭吉は元治三月、藩地中津に帰省し、滞在二ヶ月の後、中津藩士中の俊秀の青年六名を伴って六月二十六日に江戸に帰着した。これは、安政五年大阪の緒方塾から藩命で江戸に出るときに、一旦帰郷して母に別れを告げて以来、六年ぶりの帰郷で、その間には二度も外遊し、……永い間、老母に心配ばかり掛けていたから、家を成し名を挙げた健康な姿を見せて、母の意を慰めようとの考えからであった。それと同時に、同藩士の子弟の中から、将来自分の片腕として信頼するに足る俊秀な青年達を選んで、江戸に伴い帰ろうとの意図を持っていたのである。

### 【中津から優秀な子弟を連れて帰る】

せっかく江戸の中津藩中屋敷の中に引き移って、大規模な英学塾に発展する用意はととのったが、諭吉自身は幕府の公用もあり、学生の指導に専念するわけには行かず、さりとて現在その手もとに集まっている塾生たちの中には、真実に学問研究に没頭して後進の子弟育成のために献身しようという心掛けの者もほとんど見当らないので、諭吉は身元の慥かで性格の堅実な者を、同藩子弟の中から選抜して江戸に連れて行き、これを養成して自分の志を託そうと考えたものと思われる。諭吉はあらかじめ藩士中の有力者に相談して、藩士の二男三男で家事に係累のない子弟を物色し、第一に目をつけたのが小幡篤次郎（とくじろう）であった。篤次郎の父小幡篤蔵は供番という家格の上士で高二百石、若くして元締と郡奉行とを兼ねた有能な人材であったが、身分格式上の争いから藩の重役にタテをつき、お咎めを受けて隠居のやむなきに至り、当時まだ嗣子がなかったので、服部五郎兵衛の弟孫兵衛を養子に迎え、これに自分の妹を配して家を嗣がせた。その後で篤次郎、仁三郎の二人の男児が生まれた。そのためこの二人は篤蔵の実子ではあるが、養子の兄孫兵衛が後を継いでいるので、二男三男の身分であった。篤次郎は学才俊秀で、藩儒野本三太郎に就いて漢学を修め、二十三歳で藩校進脩館の教頭のようなことをしていた。純乎たる漢学書生であったから野本や島津祐太郎らが自分を諭吉に推薦していると聞いて、洋学修業などとんでもないと、姿をくらましてしまった。そこで諭吉は服部五郎兵衛や竹下郁臓に相談し、二人は篤次郎を探し出して、諭吉ともども懇々と洋学修業の必要を説得した。服部は篤次郎の義兄孫兵衛の実兄で、

本人姓名	中上川 嘉吉
生年	文久三年
住所	中津藩中屋敷
主人姓名	中津藩主
主人家系	中津藩
年次	元治三月
入社年月日	三月十六日
入社後入社名印	福澤諭吉

諭吉が少年のとき、この人に就いて漢学の手ほどきを受けた関係にある。竹下は篤次郎の叔父（父篤蔵の弟で竹下家の養嗣）である。共に藩中の開明派に属する人々である。これらの人々の勧説に、篤次郎もようやく納得して江戸行きを承諾した。

ところが、ここに一つの難関があった。それは篤次郎の母である。父篤蔵は既に没して今は母一人であるから、母はその子を遠く手放すに忍びず、篤次郎もその意にそむきにくいような風を示したので、諭吉は一策を案じ、江戸には養子の口がたくさんあるから、前途有望の青年を一生部屋住みのままに朽ち果てさせるより、思い切って江戸にお出しなさいと勧めたところ、その頃の親が最も心を砕いたのは二男三男の身の振りかたであった、養子の口がたくさんあると聞いて、篤次郎の母もようやく乗り気になった。そこで更に語を継いで、養子の口には、もうすこし若いのを望むこともあるから、弟の仁三郎君もお出しなさいと説き、遂に篤次郎、仁三郎の二人を、養子の口を餌にしてかどわかして来たと、後に諭吉は笑い話に語ったことがあるという。

この小幡兄弟とともに、服部浅之助、小幡貞次郎、浜野定四郎、三輪光五郎の六人を連れて帰ることに成功した。この人々の入塾によって、慶應義塾今日の基礎が固められたといっても過言ではない。左（以下）に少しくその人々のことを記しておきたい。

#### 【塾の基礎を築いた人々】

小幡篤次郎は、諭吉の期待に違わず、学殖豊富、人物重厚、終始諭吉を輔けて慶應義塾の教育と経営とに生涯を捧げ、塾では諭吉に次ぐ長者として社中の尊信を集めた。弟仁三郎と共著の『英文熟語集』は、英語のイディオムやフレーズの本邦最初の辞書である。『天変地異』は、中国のいわゆる地水火風空の自然現象を平易に説明した啓蒙書で漢訳されて台湾の初等教育の教科書に使われたこともある。『英氏経済論』は有名なウェーランドの『経済学要論』の邦訳である。中津の市学校の初代校長として赴任したこともあったが、終始慶應義塾の中核に在り、晩年は諭吉の社頭の下で副社頭を、諭吉の没後には社頭をつとめた。弟の仁三郎（のち仁の字を憚って甚三郎）は、兄の重厚温和とは対照的に俊敏鋭利な性格で、気概に富む人物であった。維新の騒乱に際し、外国公館の雇人の証明書を持っている者には、官軍も手出しをしないだろうというので慶應義塾の教員や学生のために証明書を与えようといった外国公使の申し出を、キッパリことわった甚三郎の一言は、諭吉の最も喜んだところで、諭吉はこの話を繰り返し書き残している。明治の初め、義塾が新銭座から三田へ移転の前後には、ほとんど甚三郎ひとりで塾務を切り回していたと伝えられる。旧藩主奥平昌邁（まさゆき）に随従してアメリカに留学し、明治六年病を得て彼地で死んだ。諭吉はその最晩年まで甚三郎を忘れず、『修身要領』編纂の際のごときは「小幡甚三郎と小泉信吉とが生きて居てくれたら、こんなとき相談相手として一番たよりになるのだが・・・」と嘆いたという。（中津から連れて帰った青年たち六名については、以下で紹介します。添付資料1参照）。

#### 【紀州塾生そのほか】

小幡以下の青年たちが塾生の中核になるにつれて、福澤塾の名声はあがり、諸方からの入門者がようやく多くなって塾舎も次第に余裕がなくなり、紀州藩から同藩士の子弟数名の入門者が

塾申込があったときには、もはや塾舎が手狭で収用しきれないから、通学ならばよいが入塾はお断りと謝絶すると、紀州藩では、しからば当方で塾舎を建ててから入塾を許可してもらいたいと言って、藩が費用を負担して塾舎を屋敷内の奥の方に建てて、そこへ紀州の書生だけを收容することにしたという。慶應二年霜月二十八日、紀州藩士が、一時に九名入塾したことがある。それは右の紀州塾ができたからであろう。広井智吉、小川駒橋、和田与四郎、小杉浩太郎、辻村得一、畑上徳太郎、小泉信吉、内田今三郎、草郷清四郎の九名がそれである。そのうち、小川駒橋は、明治になってから文部省に入って翻訳係に勤め、のち長崎師範学校長となり、明治十三年に横浜正金銀行に入社した。ノーベル賞の受賞者理学博士湯川秀樹の祖父である。和田与四郎は、のちの慶應義塾幼稚舎の創立者和田義郎である。夫婦とも子供ずきで、性質きわめて温和、柔術の達人で、幼稚舎生にみずから柔術を教え込んだ。小泉信吉は、はじめ塾や政府の学校で教鞭を執っていたが、明治七年諭吉の尽力で紀州徳川家から留学費の支給を受け、諭吉の甥中上川彦次郎と共にロンドン留学。帰朝して井上馨の世話で大蔵省に雇われていたが、明治十三年横浜正金銀行創立のことに参画してその副頭取となり、再びヨーロッパを巡遊して、帰国後大蔵省に入り主税官となった。その後明治二十年諭吉の懇請により慶應義塾総長となって大学部創設のことに当たり、塾長にも選ばれたが、退任後日本銀行に入り、再び横浜正金銀行支配人となり、明治二十七年在任中に病死した。嗣子信三が成長して慶應義塾大学教授となり、のちに塾長に選ばれて父子二代の塾長として知られた。・・・紀州からは、明治時代の名医と言われた松山藤庵も来ていた。この紀州出身者と、前記の中津出身者と、維新戦争後に入塾した越後長岡藩の出身者と、この三藩人を慶應義塾の三藩閥と呼ぶ者もあった。・・・土佐出身の馬場辰緒慶應二年五月の入門であったが、彼は英文の自伝に当時の塾の様子を、この学校に入学した者どもは、互に教へあはなければならなかった、と具体的に状況を記しているそうです（詳細略）。

### 【結びに代えて】

諭吉は、この後、幕府の軍艦受取委員に随行して第二回のアメリカ行きに出発するが、既に前回までに紹介してあるため、ここでは省略します。文明諸国の私立学校を見習うにはやるべき課題が山積していましたが、次回以降ご紹介します。その中でも最たる課題は、経営基盤の安定と、大学部の創設です。その前に、余りに貧弱な教科書をどうにかしなければならぬという基礎的課題が横たわっていました。中津から連れてきた青年たちを養うために、諭吉は金銭上の算段をしなければならなかったのですが、これも、諭吉は、西洋事情をはじめとして数々のベストセラーで、やりぬきました。諭吉は雇われ教師から脱却していました。

（本文：石川 武、編集・イラスト：横山 敏雄、金子 秀敏）

中津の青年六名の入塾  
なかつのせいねんろくめいのにゅうじゅく

元治元（一八六四）年六月に中津から江戸の福沢諭吉の塾へ、小幡篤次郎をはじめとする青年六名が入学した。文久二（一八六二）年幕府の遣欧使節団に随行してヨーロッパの文明に触れ、洋学による人材育成の重要性を痛感した福沢が、本格的な学塾経営を目指し、中津で集めた学生兼協力者たちであった。

六年ぶりに中津に帰省した際、藩儒野本三太郎らに塾の協力者について相談したところ、まず、秀才として知られ、藩校進脩館で教鞭をとっていた小幡篤次郎が候補に挙がった。当初、小幡は父をすでに亡くしていたので、残される母のことを考えその誘いから逃げ回っていたが、福沢は小幡の母親に対し、篤次郎は二男だからどこか養子先を探さなければいけないが、江戸に出れば口はいくらでもあると誘った。のちに福沢は、篤次郎と仁三郎（のち甚三郎）の小幡兄弟は養子の口を餌にかどわかしてきた、と笑いがら語ったという。

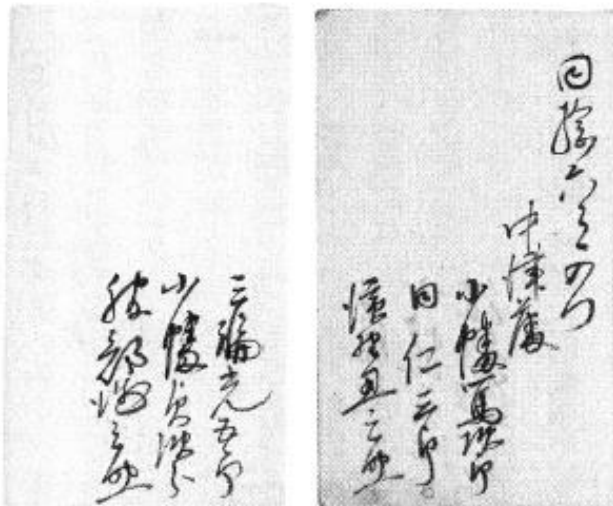
篤次郎はよく期待にこたえ、生涯、福沢のさまざまな事業を支えた。弟甚三郎はアメリカに留学するが、不幸にして明治六（一八七三）年客死する。ほかの四名は、儒学者で福沢の師である服部五郎兵衛の子浅之助、のちに慶応義塾をはじめ各地の中学や師範学校などで教鞭をとった小幡（永島、野本）貞次郎、明治一二年から二〇年まで慶応義塾長を務め、折からの財政難に対処し義塾を再建した浜野定四郎、慶応義塾出版社の事務などとり、日本麦酒醸造会社（現サッポロビール株式会社）の支配人も務めた三輪光五郎であった。

〔西澤直子〕

▼小幡甚三郎 ▼小幡篤次郎 ▼浜野定四郎

【参考】「伝」一一編。「小幡先生の逸話」全

一〇回「時事新報」明治三八年五月一日付〜二九日付。



●「姓名録」への六名の記名

入社帳

にゅうしゃちょう

入学者の氏名、年齢、出身地、父兄・保証人氏名などを記録した帳簿。三田の本塾分二八冊のほか、無罫紙本、医学所、大阪慶応義塾・徳島慶応義塾、法律学校、大学部、幼稚舎などの諸冊から成り、記載人数は延べ二万名近くに達する。本塾分は、福沢諭吉が西欧巡遊から帰国した直後の文久三(一八六三)年春より、学塾経営近代化の一環として作成が開始され、福沢の没年である明治三四(一九〇一)年の一月まで記帳されている。文久三年春〜慶応四(一八六八)年四月の無罫紙本の題箋は「性名録」、文久三年春〜明治二年八月の第一号は「姓名録」、明治二年八月〜四年四月の第二号からは「入社姓名録」となり、第一〇号以降は「入社帳」に統一され、「入社帳」が義塾の入門帳の事実上の総称となった(明治四年四月の「慶応義塾社中之約束」をみると、初期には新たに義塾の社中となることを「入社」、寄宿舎に入ることを「入塾」と呼んでいる)。

幕末から近代の日本教育史上の一級史料として、義塾創立一二五年を機に昭和六一(一九八六)年、福沢研究センターより復刻版が公刊された(ただし、幼稚舎の「入社名簿」のうち、明治三四年二月〜昭和二二年三月分は未刊)。なお、義塾の卒業生名簿(「塾員名簿」)は、大学部発足前年の明治二二年以降、平成一六(二〇〇四)年まで発行されている。「入社帳」「塾員名簿」「勤惰表」のデータは、『慶応義塾一五〇年史資料集』本篇の最初の巻として公刊が予定されている。  
〔近藤建二〕

▼慶応義塾社中之約束 ▼塾員名簿

本人姓名		中上川彦次郎	
生國	豊前中津	住所	豊前中津
主人姓名	領主ノ姓名ハ	父或ハ兄弟ノ姓名	江中川彦次郎
年齢	二十一	社中ノ入花月日	己未年八月
入塾證人姓名印	福澤諭吉		

●入社帳(明治二年)